日本糖尿病学会 国際交流委員会・将来計画委員会 若手支援企画：2026 年海外学会参加支援

IDF-WPR 2026 参加レポート

― 若手の視点から ―

藤川 勝平会員

（順天堂大学大学院 代謝内分泌内科学）



1. 参加学会

IDF Western Pacific Region Congress 2026
https://diabetescongress2026.com/
2026 年 8 月 18 日～21 日 メルボルン（オーストラリア）

2. 参加の目的

● 学会での活動目標

IDF-WPR に参加する各国の医療従事者、糖尿病教育に携わる方々、糖尿病とともに生活する方々との交流を通じて、日本と海外における糖尿病診療やケア、患者支援の共通点や相違点を学び、国際的な視点を養うことを目標としました。

● ブース担当としての役割

日本糖尿病学会（JDS）のブーススタッフとして、日本の糖尿病診療や JDS の活動、年次学術集会、研究・教育活動などについて海外の参加者に紹介し、来訪者からの質問に対応することを役割としました。また、国際交流の機会を積極的に活用し、今後海外の医療従事者や研究者と交流する際に物おじせず、自ら情報を発信できる英語力・コミュニケーション能力を身につけることも目標としました。

3. 学会参加の体験

● 学会でのブース活動内容

ブースでは、JDS がどのような学会であるかという基本的な紹介から、年次学術集会、J-DREAMS をはじめとした日本の糖尿病診療に関するデータベースの取り組み、第 5 次対糖尿病五か年計画などについて説明しました。

来訪者からは、日本の糖尿病診療に関する具体的な質問も多く寄せられました。特に印象的であったのは、1 型糖尿病の発症遅延を目的とした抗 CD3 モノクローナル抗体テプリズマブについて日本で使用可能か、1 型糖尿病のスクリーニングがどのように行われているか、といった質問です。また、糖尿病網膜症に対する眼科紹介のタイミングや診療連携など、日常臨床に即した質問もありました。

こうしたやり取りを通じて、海外の参加者が日本の学会活動のみならず、実際の診療体制や治療選択、患者支援の仕組みにも強い関心を持っていることを実感しました。

● 参加前の準備

過去の海外学会参加レポートやブース来訪者から寄せられた質問内容を参考にしながら、JDS の活動、J-DREAMS、日本の糖尿病診療、年次学術集会などについて想定される質問と回答を事前に整理しました。

実際のブース対応では、事前に準備していた内容が役立つ場面が多く、過去の参加者から経験を共有していただくことの重要性を改めて感じました。

● **特に印象に残ったセッション**

国立健康危機管理研究機構（JIHS）国立国際医療センター 糖尿病内分泌代謝科の小谷紀子先生が登壇された、政策と糖尿病対策をテーマとしたセッションが特に印象に残りました。

このセッションでは、各国の政策立案に携わる参加者とフロアの参加者が交互に意見を述べる形式で議論が行われ、砂糖税（sugar tax）などの政策的介入によって人々の糖摂取行動を変えることができるか、といったテーマが取り上げられていました。

一方で患者側の視点からは、糖分の多い食品を避けたとしても、価格の安い高脂肪食品の摂取が増えれば、かえって肥満を助長する可能性があるとの意見も聞かれました。また、税制による介入だけではなく、適切な範囲での政策的対応と同時に、教育を通じて正しい知識を伝えていくことが重要であるとの意見も示されていました。



医療従事者や患者だけでなく、政策に関わる立場の方々も同じ場で議論していることが非常に新鮮であり、糖尿病対策には医療のみならず、教育、経済、社会政策など多方面からのアプローチが必要であることを改めて考える機会となりました。

● **海外参加者との交流やネットワーキング**

小谷先生には各国の糖尿病診療・研究に携わる先生方をご紹介いただき、直接お話しする貴重な機会を得ることができました。

また、JDS ブースを訪れる方々は非常にフレンドリーで、質問への回答をきっかけとして、それぞれの国における糖尿病診療や医療制度について逆に教えていただく場面もありました。単に日本の情報を一方向に発信するだけではなく、互いの国の診療や文化的背景について意見交換を行うことができたことは、ブース担当ならではの貴重な経験でした。

4. 学んだこと・成果

● **学会参加・国際交流を通じて学んだこと**

今回の参加を通じて最も強く感じたことの一つは、国際交流におけるリスニング能力の重要性です。自分の考えを英語で伝えることに加えて、相手の発言を正確に理解できなければ、活発な議論に十分参加することはできません。特に複数人でのディスカッションでは会話の速度も速く、リスニング力が議論への参加の前提となることを痛感しました。

一方で、自分から発言し、その内容が相手に伝わり、さらに相手からの反応を受けながら議論を続けることができた場面では、国際交流ならではの楽しさと達成感を感じることができました。英語力に課題があるからこそ、実際に使用する場に身を置き、臆せず発言する経験を重ねることが重要であると感じました。

● **JDS の国際的プレゼンス向上について感じたこと**

ブースでは、日本糖尿病学会の年次学術集会に英語のセッションがあるかについて複数の参加者から質問を受けました。

日本の糖尿病診療や研究そのものには関心を持っていただける一方、学術集会における言語面でのハードルは、海外からの参加を検討する際の大きな要素となることを実感しました。日本の優れた診療・研究成果をさらに海外へ発信し、海外からの参加者を増やしていくためには、英語で参加できるセッションや情報発信を今後さらに充実させていくことが重要であると感じました。

5. 今後の抱負

● 今後の研究や学会活動に対する意欲

今後、研究活動を進める中で英語論文を読む・執筆する機会はさらに増え、国際学会においてもリスニング・スピーキング能力が不可欠になります。

今回の経験を一過性のものとせず、日頃から少しでも継続的に英語に触れる習慣を持ち、特に課題として感じたリスニング能力を向上させたいと考えています。また、自身の診療や研究について海外の医療従事者・研究者と議論し、日本から積極的に情報を発信できるよう努めていきたいと思います。



● 次世代へのアドバイス

IDF-WPR は、最新の研究成果のみならず、患者とのコミュニケーション、糖尿病教育、医療制度、社会政策など幅広いテーマが取り上げられ、医療従事者だけではなくさまざまな立場の参加者から活発に意見が交わされる学会であると感じました。

海外学会への参加は、今後の診療や研究を考えるうえで非常に有意義な経験になると思います。日本国内にいるだけでは気付きにくい、日本の糖尿病診療が海外からどのように見られているかを知ることができるほか、各国の医療制度や患者を取り巻く価値観の違いに直接触れることができます。

英語に自信がなくても、実際に参加し交流することで得られるものは非常に大きいと感じました。機会があれば、ぜひ積極的に応募・参加を検討していただきたいと思います。

6. その他

今回の参加は、学生時代を含めると自身にとって 2 回目の海外学会参加となりました。学生時代に参加した際と比較すると、臨床経験を積んだことで講演内容を以前よりも具体的に理解し、自身の日常診療と関連付けながら聞くことができるようになったと実感しました。

その一方で、特に英語のリスニング能力が十分でないために、興味深い講演や議論であっても内容を十分に理解しきれない場面があり、自身の課題も明確になりました。今回感じた悔しさも今後の学習への動機とし、次の機会にはより積極的に議論へ参加できるよう研鑽を重ねていきたいと思います。

今回の学会参加を今後の診療・研究の糧とするとともに、学会参加および JDS ブーススタッフとしての活動に際し、渡航前の準備段階から現地での活動まで多大なるご支援をいただいた JDS 事務局ならびに関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

今後もこのような若手医師・研究者が国際的な場に触れる機会が継続し、日本の糖尿病診療・研究を世界に発信できる人材がさらに育っていくことを願っております。